

A・アブドルマリク著

『イデオロギーと民族
再生——近代エジプト』

Anouar Abdel-Malek, *Ideologie et renaissance nationale...L'Egypte moderne*, Paris, Editions Anthropos, 1969, 575 p.

I

戦前よりも、第2次大戦後においても日本の現代アラブ研究は、ながい間ヨーロッパのアラブ・イスラム研究（オリエンタリズム）に依拠しつづけた。植民地支配との結合、ヨーロッパ中心主義、イスラム停滞論といったオリエンタリズムの「原罪」の告発は、このようなオリエンタリズム—辺倒への反省をうながし、現地調査と原典研究にもとづく社会科学的な研究の必要性に目を開かせたものであったが、その後現地調査と原典研究が次第に進むにつれて、ふたたび反省があらわれはじめたように思われる。「現地」へ行き、膨大な「原典」を前にした時文献からえた知識とともに、既存の社会科学の理論的枠組の再検討を迫られずにはいないが、そこでオリエンタリズムの再評価が、あらためて必要になったからである。定型化したオリエンタリズム批判（まさに「オリエンタリズム停滞論」）のために見失っていたオリエンタリズムの近年の発展を再評価することがはじめて可能になったといいかえてもよいだろう。

欧米の現代アラブ研究の動向を変化させた基本的要因は、第2次大戦後のアラブ諸国の独立の衝撃であったが、それとともにアラブ研究者の台頭、アラブ研究者との交流の発展という要因もみのがしてはならない。たとえば H. A. R. Gibb が「現代中東研究の分水嶺」と評した『アラブ、昨日から明日へ』(*Les Arabes d'hier à demain*, Paris, 1960)の著者 J. Berque の方法が新鮮なのは、伝統的なオリエンタリズムの手法にたちつつ、現代アラブ人との対話を通じて、アラブ人自身の鋭い歴史意識と現実感覚をくみあげること成功したからである。アラブ研究者だけでなく、インタビューの対象であった農民大衆までも共同研究者として評価している (*Structures Sociales du Haut-Atlas*, Paris, 1955)の序文)のは J・ベルクの傑出した現実感覚を示すものであるが、ひとり J・ベルクにとどまらず、欧米においてはアラブ研究者との共同研究の意義が十分に認識されている。

留学生から大学教授にいたる層の厚いアラブ人研究者を自国の研究機関にかかえ、アラブ諸国の研究機関との頻繁な交流をはかるという研究組織の面における努力が、共同研究を容易にし、研究水準の向上を助けているのである。

本書の著者、アヌアル・アブドルマリクも、そのようなフランス在住のアラブ人研究者の一人である。1924年カイロの知識人(そして官僚・実業家)の家柄に生まれ、フランス系ミッションの中学校を卒えた後、ブリティッシュ・インスティテュートで英語と経済学を学び、1954年アイン・シャムス大学で哲学の単位を得た。在学中から政治活動にはいり、1950年から59年にかけて言論界で活躍したが、1959年の左翼知識人弾圧の際亡命し、以来パリに在住している。1960年から国立科学研究所(C. N. R. S.)の産業社会学研究室に在籍し、1966年からは同時に高等応用研究院(E. P. H. E.)の講壇に立っているが、国際社会学会の「民族運動と帝国主義の社会学」にかんする国際共同研究を組織するなど、精力的な研究活動を行なっている。1964年に現代アラブ思想史の文献学研究で第3課程の社会学博士、1969年に本書の原型である「エジプトの民族再生におけるイデオロギーの形成」で文学博士の学位をえた。

アブドルマリクの仕事は、(A)二つの学位論文に代表されるアラブ現代思想史、(B)「エジプト、軍事社会」に代表されるアラブ現状分析、(C)アラブさらにはアジア・アフリカ研究の方法論という三つの系列に分けることができる。以下に主要論文の表題をかかげるが、カイロ時代のアラビア語での業績は参照できなかつたので省略した。

主要著作目録

- 1962 (B) *Egypte, société militaire* (Paris, Le Seuil), 384p. (『アジア経済』, 1964年12月号の川本和孝氏の書評参照)
- (B) “La question agraire en Egypte et la réforme de 1952,” *Tiers Monde*, III (9~10), pp. 181~216.
- 1963 (C) “La vision du problème colonial par le monde afro-asiatique,” *Cahiers internationaux de sociologie*, XXXV, pp. 145~156.
- (C) “L’Orientalisme en crise,” *Diogenes*, no. 44, pp. 109~142.
- 1964 (C) “Nasserism and socialism,” *The Socialist Register* (London, Merlin), pp. 38~55.
- 1965 (A) *Anthologie de la littérature arabe con-*

- temporaire*, tome 2; essais (introduction, choix, présentation et traduction), (Paris, Le Seuil), 464p.
- (C) “Problèmes de l’édification nationale dans les pays du Proche-Orient arabe,” *Tiers Monde*, VI (21), pp. 205~229.
- (B) “La réforme agraire en Egypte (R. A. U.), problèmes et perspectives,” *Développement et civilisations*, no 22, 19~27.
- 1966 (B) “Problématique du socialisme dans le monde arabe,” *L’Homme et la société*, no 2, pp. 125~148.
- 1967 (C) “Esquisse d’une typologie des formations nationales dans Les Trois Continents,” *Cahiers internationaux de sociologie*, XLII, pp. 49~57.
- (C) “Sociologie du développement national—problèmes de conceptualisation,” *Revue de l’Institut de sociologie* (Bruxelles), no 2~3, pp. 249~264.
- 1968 (C) “Vers une sociologie comparative des idéologies,” *L’Homme et la société*, no 7, pp. 115~130.
- (C) “Marxisme et sociologie des civilisations,” *Diogène*, no 64, pp. 105~133.
- 1969 (A) *Idéologie et renaissance nationale—l’Egypte moderne* (Paris, Ed. Anthropos), 575p.
- (A) “Le concept de ‘renaissance nationale,’” *L’Homme et la société*, no 12, pp. 3~16.
- 1970 (A) *La pensée politique arabe contemporaine* (Paris, Le Seuil), 378p.
- (C) “Marxisme et libération nationale—position du problème théorique,” in *Le centenaire du ‘Capital’* (Paris, Mouton), pp. 256~290.
- (C) “La notion de ‘profondeur du champ historique’ en sociologie,” in G. Balandier (éd.) *Sociologie des mutations* (Paris, Ed. Anthropos).
- (C) “Sociology and economic history: an essay on mediation,” in M. A. Cook (Ed.), *The Economic History of the Middle East*. (London, Oxford U. P.), pp. 268~282.
- 1971 (C) “L’Avenir de la théorie sociale,” *Cahiers*

internationaux de sociologie, L. pp. 23~40.

上記(A)(B)(C)の分類は、評者による便宜的分類であり、いずれにも共通して著者の鮮明な問題意識があらわれ、方法論的にも3者は密接に関連している。なかでも本書はアブドルマリクの主著であり、系列からいえば(A)に属するが、他の2系列の業績の成果がもりこまれていると、いってよい。それは本書の構成からあきらかであり、6部12章からなる本文は大別すると三つの部分からなり、それが三つの系列の業績に照応している。すなわち第1部(1~2章)は、エジプトの経済発展と社会構造の変化、第2部から第5部まで(3章~12章)は、エジプト近代思想史、第6部(13章)は、方法論的検討にあてられている。

著者自身は、みずからの学問が現代アラブ研究と呼ばれることはみとめつつも、ヨーロッパにおける伝統的アラブ研究とは峻別して「民族発展の社会学」と呼んでいる。以下で本書の内容を要約するとともに、著者の「民族発展の社会学」の特徴を抽出してみたい。

なおアブドルマリク氏は、本年(1971年)10月に来日を予定しており、アジア経済研究所をはじめいくつかの研究機関で、わが国の現代アラブ研究者と討論の機会をもつことになっている。

わが国におけるアラブ研究の動向変化に、現地調査の際のアラブ人研究者との交流があずかっていることはたしかである。しかしアラブ人研究者との交流の意義が一般に認められている点、また研究交流が組織的に行なわれている点では、まだ欧米から学ぶ必要がありそうである。その点、昨年のムハンマド・アニース教授につづくアブドルマリク氏の来日には期待されるものがある。

以下の引用は、とくにことわらない限り本書からの引用であり、ページ数のみを示しておく。

II

「イデオロギーと民族再生——近代エジプト」という表題にまず注目しておこう。

イデオロギーとは、集団的社会意識形態であるかぎりにおいて、思想ないし理念一般と区別されることはいうまでもないが、著者によれば思想がイデオロギーに転化するためには、思想が「大衆への扶植」、「大衆における受容」という過程をへて、階級、民族等に「制度として定着」されなければならない(pp. 509~510)。このことから本書が、理念の系譜や思想の流れのみを対象とする狭義の思想史ではないことは、容易に推測されるであろう。

「民族再生 *renaissance nationale*」というのは一般に定着した表現ではないが、アジア・アフリカ諸国（著者の表現では「三大陸」）の民族発展・国家建設のうち、エジプトのように国家形成の歴史が古く、しかも強固な社会的統合が維持された場合については、新たな形成というよりは再生であるという意味で「民族再生」と呼ぶわけである。*national (e)* は「民族的」「国民的」「国の」と訳し分けることができるが、著者の用法でも三つの意味を含めている。したがって「民族再生」という訳語で「*national (e)* な再生」を代表させていると了解していただきたい。

著者は、エジプトの「民族再生」を第1段階（1805～1892年）、第2段階（1919～1967年）に分けたうえで、本書の時期的対象を第1段階・近代エジプトに限定する。近代エジプトの起点を、ナポレオン遠征（1798年）ではなく、ムハンマド・アリーの即位（1805年）に、また終点を、イギリス占領（1882年）ではなく、その10年後アッパス2世の即位におくのは、ヨーロッパの圧力という外的要因よりも、エジプトの対応という内的要因を重視するからである。

ムハンマド・アリー時代からイスマイル時代にかけてのエジプトは、著者によれば、「東洋的封建制」から「国家が支配し土地所有が優位を占める植民地型後進資本主義」への過渡期(p.54)であるが、2人の治下での一連の近代化政策——富国強兵、殖産興業——は、エジプトの独立を守るための経済建設の自主的努力であった。それは列強への従属下での国際経済への統合によるモノカルチャー、地域的不均等というゆがみをもたらしたが、同時に統一の国内市場の形成というエジプト覚醒の基礎条件を作り出した（第1章、「経済発展」）。さらに、「都市と農村の有機的統合」、「資本主義に先行する資本主義セクターの発生」が、民族運動を担う社会階層を成長させ、民族運動が全国的に展開する基礎となる（第2章、「社会構造の変容」）。

国家セクターの重視、形成途上のエジプト・ブルジョアジーの政治的行動を規定するイデオロギー的要因の強調、ムスリムとコプトとのエジプト人としての一体性の評価などにみられるように著者は下部構造決定論の立場をとらず、「イスラム」「アラブ」よりも「エジプト」を重視する見解に立っている。

第1部の下部構造の分析を第3部以下のイデオロギーの分析につなぐ媒介項が第2部、「文化的再生の基礎」であり、留学生の派遣、翻訳（第3章）、教育改革、印刷

出版（第4章）が論ぜられる。いずれもムハンマド・アリーとイスマイルの指示によったという意味で「上からの」、国家の先導による軍事と産業優先という意味で「富国強兵」そのものと結びついた近代文明の開花であるが、それがイデオロギーの媒体を用意したわけである。ここでは、留学生の先導者としてのリファア・ラーフェイ・アッタフターウィ（1801～73年）、教育制度の改革者としてのアリー・ムバーラク（1824～93年）の業績、すなわち2人の思想家の改革派官僚としての側面が述べられる。

第3部「民族運動イデオロギーの形成諸要因」では、外からのサンシモン主義の影響（搾取絶滅理念のぬけた殖産興業主義としての側面）、内からの歴史意識と祖国概念の誕生をとりあげる。それぞれについてアブドルラフマン・アルジャバルティ（1754～1825年）、ムアリム・ヤクーブが紹介されるが、著者の力点は啓蒙家としてのタフターウィに置かれている。なぜならばかれこそ翻訳を精力的に続けるなかで「フランス大革命の原則を近代エジプトの民族再生に浸透させ」（p.220）、また「近代的祖国観の理論的基礎を築いた」（p.228）からである。コプト人ヤクーブの反トルコ主義の重視、ウンマ（イスラム的共同体）からのワタン（祖国）の分離の評価などここでも著者のエジプト主義的立場があらわれている。

つづいて第7章「民族独立と立憲主義」はエジプトの自立と立憲運動をめぐる政治過程をエジプトの支配者、新興社会階層、ヨーロッパ列強の3者の対抗関係において描き、第4部「*modernisme libéral* と近代の問題」では、日常生活、婦人解放運動（第8章）、文芸運動（第9章）を社会史との関連にふれながら叙述する。

19世紀における経済・政治・文化・社会におたるエジプトの変容を前提として、時期的にも1879年（イスマイルの退位）から1892年に限定したうえでまずイギリス占領下の文化政策を告発し（第10章）本書の核心であるイデオロギーの形成と分化の分析にうつる。アラビー革命の占領軍による圧殺という歴史的な時期に、民族思想がイデオロギーとして顕在化し、「*modernisme libéral*」と「*fondamentalisme islamique*」いう「現代エジプト思想の二つの源泉」に分化しつつ、急速に政治・社会思想として急進化する過程を、二つの傾向の相互作用においてとらえることが著者の中心的課題である。

ところで、外からのインパクトによる近代化に対して、また外圧による民族の危機に対して、エジプトだけでなく日本を含むAA諸国において一般的に二つの対応がありえた。外来文化を積極的に取り入れて近代化の推進を

はかるか、あるいは外来の影響を排除し、固有の伝統の回復をはかるか、である。著者は第1の立場を *modernisme*、第2の立場を *fondamentalisme* と呼ぶが、本来的に前者が国際主義と漸進主義への、後者が排外主義と復古主義への傾向をもっていることはいまでもない。しかしながらそのいずれが歴史具体的文脈において、よりラディカル（急進的であると同時に根源的という言葉本来の意味において）でありうるかは、それぞれの国の歴史的条件と現実の政治過程によってまったくことなることに注意しなければならない。

エジプトにおける二つの傾向のうち、著者は、*fondamentalisme islamique* の分析からとりかかる。著者によれば、この系譜はジャール・アッディーン・アルアフガニニー（1838～97年）、ムハンマド・アブドゥ（1849～1905年）からムスリム同胞団さらに自由将校団までつながるものである。民族の危機の原因を自己のうちにもとめイスラムの源泉にたしかえろうとするこの立場は、外国への抵抗と自己変革にかんしてよりラディカルであり、とくに宗教思想においては、大衆と結びついた民族イデオロギーを作り出した。しかし政治思想としては、思想を宗教に従属させ、民族内部の対立に目を閉ざし、歴史を否定するために保守主義と結びついたと著者は考える（第11章）。

もう一方の *modernisme libéral* は、その折衷主義的性格からきわめて多様な立場を含みうるが、著者はクフターウイからターハー・フサイン（1886年～）、エジプト・マルクス主義者グループという系譜でとらえている。まず晩年のクフターウイをとりあげ、愛国・富国思想から社会経済の分析に立つ社会改革思想に達したということから、愛国主義と社会主義の先駆者としての評価をあたえる。ついで1879年から82年にかけてのヒズブ・ル・ワタニ（祖国党）が民族的要求を現実化した点は評価しつつ、まさに現実的政治運動であるがゆえに、政治的力関係と運動の担い手の社会的性格に制約されて思想的には自治と上からの改革という漸進主義的イデオロギーであったことを指摘する。

イギリス占領直後の混乱期は、イデオロギーが大衆へ浸透する時期であり、二つの思潮のいずれにおいても理論的に深まり、それが新しい局面におけるイデオロギーの分化を一層おしすすめる。アブダツラー・アンナディーム（1843～96年）の急進主義、革命的ロマンティズムが、革命的人民主義への先駆者としてとりあげられる。

第6部「エジプトの民族・文化再生の特殊課題」は、

本書全体の結論であり、きわめて簡潔な本文の要約とともに、方法論の問題が論ぜられるが、方法については別に論ずることにしたい。

巻末の目録では、文献目録のみを採録し引用文献は脚注におさめている。アラビア語の語彙集、人名、地名索引もついている。

III

本書の価値は、第一に近代エジプト思想史という題材にあるというべきである。最近の流行の一つに近代日本の一経験（明治維新）と現代のAA諸国との比較論があるが、それが常にAA諸国の近代史についての乏しい知識——というよりもしばしば絶対的無関心——の上にくみだてられている現状からいって、エジプト人研究者による本格的近代史研究である本書の意義は高く評価すべきであり、日本史研究者をも含めたひろい範囲の専門家に読まれることが望まれる。しかしながらわが国の現代アラブ研究の課題からみれば、本書の記述から事実と事実判断のみを断片的に吸収するだけでは、もはや不十分であり、事実そのものの典拠について吟味するとともに方法論上の問題、さらに著者自身の思想的立場をも検討することが必要であろう。

学位論文としての性格からいって、文学から地理、歴史、社会経済史学にわたる膨大なアラビア語、ヨーロッパ語文献が引用されており、文献批判の当否については評者の能力をはるかにこえているので早速方法の検討にうつることにしたい。

本書の対象は近代エジプト思想史であるが、その方法と内容からいって狭義の思想史ではない。近代エジプトの政治・経済・社会の変容は、思想史の展開の単なる背景として叙述されるのではなく、著者の意図は両者の関係そのものを追求することにおかれている。しかし入念な文献抄録によって集められた膨大なデータは、あらかじめ精緻に組みだてられた枠組に照らして厳格に取捨選択されるというよりは、記述主義的方法で、あるときは詳細に分析され、またあるときは象徴的な事例として列挙される。したがって記述の重複が各所に散見されるという欠点もあるが、まさにそれゆえに思想史と政治史・社会経済史の発展が単なる平行現象としてではなく、相互に規定しあう過程として具体的なイメージにおいて描き出されるわけである。とはいえ著者の研究方法がまったくの経験主義で一切のモデルを排除しているかというところではない。

著者が序と第6部で述べている問題とは、著者自身の言葉を用いつつ著者の表現から離れてあえて数学的に表現すれば、「近代の侵入」を独立変数とし、「民族再生」を従属変数とする方程式を、「経済」「諸制度——とくに国家と社会階級」「イデオロギー」という三つの媒介変数を用いて解くことである。これが本書だけでなく、著者のいう「民族発展の社会学」の基本問題であるが、このような方程式表現が適切に示しているように著者は上記の諸要因を相互連関において考えているということであって、本書のある部分では「イデオロギー」を規定する他の諸要因を追求し、他の部分では「民族再生」の規定要因を尋ねる。さらに本書が形成や発展を問題にすることから当然に考えられるように、上記の函数関係に時間の要因を入れて、比較静学や動学の分析をも試みる。たとえば、イデオロギーの変革は、ある時点における三つの要因の「共生 symbiose」関係が、弁証法的に「総合 synthèse」されることによって達成されるという図式(pp. 503~504)、また、イデオロギーという同一次元における「潜在的イデオロギー ideologie implicite」と「顕在的イデオロギー idéologie explicite」の共存からその統一への発展など(p. 504~504)。

著者の関心がたんにエジプトの「民族再生」の個別具体的分析のみにあるのではなく、「民族形成の社会学」にある以上、比較の観点は当然にもっている。比較は、西欧と「三大陸(AALA)」の比較、「三大陸」における各民族の比較の二つにわたっており、本書においてもしばしば日本への言及があるが、比較を通じて普遍史的法則をもとめるといよりは、各民族の特殊条件と、それを規定する諸要因を解明することに著者の主要な関心があると思われる。

本書の第6部や著者の(C)系列の著作は表現形式の相違からやや難解であるが、扱われている問題は普遍的であり、方法もまた他の民族の事例に援用可能である。

著者の思想的学問的立場については、これまでたびたびふれてきたが、それがもっとも顕著にあらわれるのは、「modernisme」と「fondamentalisme」、いかえれば、タフターウイとアブドゥをめぐる著者の考え方においてである。

本書の叙述からいっても、また本書が「エジプト人民とタフターウイ」に献呈されていることからいっても、著者がタフターウイを高く評価していることはあきらかである。

それはなによりもタフターウイが「エジプト思想の近

代化という歴史的任務」(p.508)をになっていたことに対してであるが、本書が対象としている時期は、「列強の侵略への抵抗が民族意識を支配」(p.479)し外圧による変動の危険に対して、「民族的宗教的個性の一体性」(p.508)を確認することが必要な時期であり、タフターウイの影響は、近代教育をうけた少数の知識人に限られ、国民大衆は「世界と民族の将来についてのビジョン」(p.504)を示すにいたらない modernisme よりも、アブドゥらの fondamentalisme にひきつけられざるをえなかったことは著者自身もみとめるところである。

それにもかかわらず、タフターウイをことさらに高く評価するのは、本書では直接に取り扱わなかったエジプトの「民族再生」の第2段階、すなわちナセル指導下のエジプト革命への批判が、著者のイデオロギー研究の根底にあるからである。エジプトの真の変革を導くイデオロギーのうえでの「総合」を妨げたアブドゥから自由将校団につながる「fondamentalisme」の「歴史的責任」を告発し(p.509)、それがみずからも属したエジプト・マルクス主義者グループの「modernisme」の無力さへの痛恨と重なり合って、「modernisme」の先駆者タフターウイへの高い評価が生み出されたといえるだろう。この推定が正しいとすると著者の考え方が形式は「fondamentalisme」そのものであることに歴史のアイロニーを感じる。亡命中のエジプト・マルクス主義者という著者自身の立場と、本書で示された著者の見解とがまったく分ち難く結びついていることを痛感させるものである。

研究のうえでの国際的交流が進み、著者のようにフランスの学界で日常的に活動していても、タフターウイとアブドゥのような歴史上の人物を評価する際には、研究者としての主体的立場とそれを支配するエジプトの歴史の重みがあらわれずにはいない。

そのかぎり、またそうした基本的条件の相違を相互に確認しあうかぎり、著者との、またより一般的にはアラブ人研究者との対話の意義があるといえよう。

(調査研究部 宮治一雄)